

①
志加貝 窪昂シゲタカの略リョウ廠ヤ

文久三年生

北海道札幌サッポロ農学校（北海大學）卒業

地理學に特に興味を持つ

明治十九年（一八八四年）海軍兵學校の卒

業航海に随ズイ行コウし、練習艦リョウギン琉波リュウハで南洋

諸島をまわり、南洋諸島に於ける列強の

植民地経営を觀察し、経営的立場から

地理學とゆうか、その同、獨創的の基礎

を作った。この時、著書が「南洋時事」で要

するに國家は生産力を増強しなければなら

ない、とゆう論旨によつて、當時浮薄な政

事にあけられてゐた政界と言論界に衝

撃を与えた。この立場は、晩年地理學者と

して、英王立地理學協會の名誉會員にな

るにいたるまで終始かわらなかつた。かれもまた明

治のこの新興國家の象徴的人物であつた

「ジャーナリスト」としての志賀重昂は、明治
新法は、かれが作つた雑誌「日本人」と
南や正岡子規の如き新詩「日本」と東京
朝日新聞などである。

さらに明治陸軍が、かれを乃木司令部に従
軍させた理由の、その一つは英文がうまいこ
とであり、ロシア軍に対して降伏勧告文を
書いた。あるいはステセルが降伏して来た場
合の通訳とすることであり、又、さらには必要
以上の戦時軍刑法の優待生たろうとした。曰
本陸軍としては、そのルールを知つてゐる志賀
を乃木につけることに依る、其の真の誤り
をなかりしめようとしたのであつた。

乃木は十二月十日夜、終夜飛雪が、柳樹房の
天地に舞つてゐた時、詩想を得たものらしく
翌十一日、朝、志賀重昂に話した。で
ある。

こり十一日午後、二ノ高地で死んだ。次男
が、偶典の道骨と道骨が軍司令部に
届けられた。

以上 司波遼太郎著
「坂の上の雲」に依る

2 解説

土まほしくなりきりたが 春日松書

― たものを航令便にて 奉送 ― した。

A. 色紙は土まほしく文の通り 望さんに読んで

頂いたものを置いまして

紅葉の巻りてえん 感にかう 秋の深さを 読ん

たもうと思はれます。

B. 額 明治三十八年（乙巳）の作で 文句の

通り 雄大な氣持を現し、よく 志のわがいでしあう

C 掛軸 乃木希典 將軍が 白露武家の 抄

花順云。その地を攻奪し、た時の 有るを 詩を

す文と 後文に分け 志賀先生が 詩を作ら

たものでしあう

後文は 私も ちやうど 改訂したか、この 詩は

想わしきしと

(参考) 二、一ものか、あやうませんか、

ろくをりや

やまをはく

大、海

吐、山

標高そのまじや、乃木土將の子息が死にたことにちなや
爾靈山」ともてたとわかれてゐます

に、れい、さん、けん、あに、よじがながうんや

爾、靈、山、陰、山、難、嶽

だん、い、の、こ、め、う、こん、かん、を、き、す

田、力、子、切、名、期、十、元、難

て、け、つ、や、ま、を、あ、あ、さん、け、あ、う、な、ま、る

鉄、血、覆、山、山、形、改

はん、にん、ひとく、あ、あ、ぐ、に、れ、さん

萬、人、齊、仰、爾、靈、山

え

至、芥、(ぎやくふをこう) 典

自分の詩をこゝろ下さうと云う意味

典は希典の典をもつたもので

支那では一言を用いたりでそれにうたひたりで

東定稿(これから東定稿すかも知れない場合)

に書く、下書との意味

爾靈山嶺豈難攀

田子印名期名報

ろ
う

りよ（い）さんぜんこのけんにあり

唐兵リ敵兵

慮兵三々據此嶺

田壘リとりで 濠リさんごう

るいをかたくりほりをさうてせけんかん

固壘浚濠勢堅頑
しょうぐんこれをやてじすでにけつす

攘リうちほう

將軍視之辭既決

色目若リ態るがわわらな

此敵不攘不生還

るいしかべをきずきかへぬのはさかん

累屍築壁々為殷

いはいししょうはんをばいし

四敗四勝倍胆氣

ひなくひんをおかすこつかかん

親冒飛彈九日旬

ごはいろくしょうりよへいはいる

五敗六勝唐兵在

しやうをきつてんしこころはんす

南捷天子師重班

捷リ勝
師リ軍隊

をみみずや

君不見

鉄血 覆山 山形 改
某 人 齊 仰 爾 靈 山

後 文

のぞかへしちうさうさくはむす

知 乃 本 大 將 亭 作

志 加 賀 重 日 印 川 科

北 米 帝 國 平 原 亭 中

齊 藤 徳 三 郎 君 正

爾靈山嶮豈難攀
男子功名期克艱
虜兵三千據此嶮
固壘浚濠勢堅頑
將軍視之辭既決
此敵不攘不生還
三敗三勝色自若
累屍築壁々爲殷
四敗四勝倍胆氣
親冒飛彈九日間
五敗六勝虜兵走
聞捷天子師爰班
君不見
鉄血覆山山形改
万人齊仰爾靈山

和乃木大將高作

志賀重昂

北米帝國平原客中

齋藤德三郎君正

爾靈山嶮豈

難攀

男子功名期

克艱

鉄血覆山山

形改

萬人齊仰爾

靈山

乞

玉斧

典

未定稿

元明天
恭輝沙

曹山釋元恭

明治己亥秋

山吐海吞

大陸周遊六千里

もみぢさへ

眼
に
入る者
は

秋
の
風